

S071 続・アフリカの昆虫食、特にケニアにおけるシロアリの利用

○八木繁実（多摩アフリカセンター）・岸田袈裟（岩手医大）

以前この小集会で、一般講演での「アフリカの昆虫食」(1, 2)を中心として発表した。即ち、演者らは90年代半ばから西ケニアとその近隣地域で昆虫食、特にシロアリ食の調査を行い、特に雨期においてシロアリ(羽アリ)食が現地の食生活で不足がちな動物性タンパク質と脂肪成分の摂取に役立っていることを報告した。

今回は、現地で継続して行っているシロアリの様々な利用について、一般講演「アフリカの昆虫食」(3, 4)を元にして報告する。シロアリは直接食べるばかりでなく、地域によっては、「婚資」に利用され、シロアリの塚の土を妊婦が好んで食べる地域もあることがわかった。さらに、シロアリの塚から生えるキノコもよく食べられ、それらは現地のマーケットで売られていた。また、野生のウズラをウズラを用いたトラップで捕える際、シロア리를ウズラの餌として利用していることも判明した。

なお、人以外の昆虫食、シロアリの塚の土などの土食(geophagy)についても若干の知見を報告したい。

S072 イネ科草本の植栽による農地植生の多様化がトウモロコシの害虫ズイムシと捕食性昆虫群集に及ぼす影響

小路晋作（金沢大・理・生態）

東アフリカには、2400種以上のイネ科草本が分布し、牧草や建材として利用されている。これらは、捕食性昆虫や寄生蜂といった有用昆虫の生息場所ともされるが、各種における捕食性昆虫相や、害虫防除効果は十分に明らかにされていない。本研究では、ケニア西部において代表的な牧草であるギニアグラス *Panicum maximum* を対象とし、これをトウモロコシ圃場の周囲に植栽して捕食性昆虫相を調べると同時に、捕食性昆虫の除去実験により天敵が害虫個体群に及ぼす影響を調べた。

優占した捕食性節足動物のうち、ハサミムシ類とクモ類では、ギニアグラス上での個体数がトウモロコシ上に比べ1.6-5.5倍多かった。この差は、ギニアグラスの草丈が最大となる作期の後半に著しかったことから、好適な微小生息場所や代替餌(花粉)の供給が個体数増大の原因と考えられた。ピットフォールトラップと見つけ取りにより、天敵除去区におけるハサミムシとクモの個体数を約50%減少させたところ、ズイムシの密度は対照区に比べ高く、これらの天敵がズイムシ個体数を低減させ得る事がわかった。

S073 アフリカ半乾燥地帯に適応したネムリユスリカ(DVD映像紹介)

○奥田 隆（農業生物資源研究所 生体機能研究グループ）

ネムリユスリカ(*Polypedilum vanderplanki*)の幼虫はアフリカ半乾燥地帯の花崗岩の岩盤にできた小さな水たまり(Temporal pool)に生息する。約4ヶ月間の雨季の前半、水たまりの中には、ネムリユスリカの幼虫のみが観察されるが、後半に入ると蚊の幼虫のボウフラやヌカカの幼虫も混生する。乾季が始まり、水たまりの水が干上がると、乾燥耐性を持たないボウフラがまず死ぬようになる。ヌカカの幼虫は厚いクチクラの皮膚を持ち比較的乾燥に強いので、水たまりの底に溜まった乾いた土の中で2、3ヶ月間は耐えるが、それ以上長く続く厳しい乾季を乗り越える事はできない。ネムリユスリカ幼虫のみが、ほぼ完全に脱水した状態(クリプトビオシス)で8ヶ月に及ぶ長い乾季を最後まで耐え、次の雨季で雨が来ると、乾燥幼虫は吸水して1時間以内に再び発育を開始する。本講演ではネムリユスリカがナイジェリアの生息地でどのような生活史を送っているのかを現地で撮影した映像で紹介する。